

街のストーリー



屋根下のカーゴ



セブンイレブン上総一宮店 代表取締役
一宮町商工会青年部 部長

吉野 健史 さん

●プロフィール

1975年生まれ。セブンイレブン上総一宮店代表取締役。一宮町商工会青年部の部長として、2020年に開催される東京オリンピックをきっかけに、分野を越えた仲間と手を取り合い、新たな一宮町づくりを目指す。



人が好き、祭りが好き、このまちが大好き 明るい笑顔でみんなの心を繋ぎたい

東京オリンピックは 新たな一宮町創造のチャンス

2020年に開催される東京オリンピックのサーフィン競技会場となることが決定した一宮町。

これを機に、これまで繋がりが薄かった分野の人々とも互いに手を取り合い、新たな一宮町を創ろうとしているのが、現在、町の中心部に位置する商店街で、コンビニエンスストア（以下、コンビニ）を営みながら、一宮町商工会青年部（以下、青年部）の部長を務めている吉野健史さんです。

地元を愛される コンビニを目指して

吉野さんが経営するコンビニは、国道沿いの好立地にあります。車で通る人が立ち寄るにも便利なお店ですが、比率で言えば地元のお客様の方が数多くを占めています。

約30年前、実家が酒の問屋と小売業を営み、父親が経営を担っていた頃、周辺に次々とコンビニがオープン。吉野さんの父親も、時代の流れに乗り遅れぬよう、コンビニチェーンへ参入しました。その頃すでに、将来は家業を継ぐと決めていた吉野さんは、大学卒業後、社会経験を積むために一般企業に10年間勤務。10年前に実家に戻り、お店を引き継ぎました。

引き継いだ当初は、2代目ということもあり、父親の経営手法と比較されることも多かったと語る吉野さん。通常、コンビニの店づくりは独自色を打ち出したり、他店との差別化を図るのが難しいものながら、吉野さんの父親は、定められたルール

商業・農業、サーフィンの融合で、 新たな一宮町を創る！

東京オリンピックの影響で、近年過去に例が無いほど注目を集めている一宮町。吉野さんが部長を務める青年部は、これを機にある計画を実行しようとしています。

その計画とは、現在、サーフィンを中心とした海岸通りの賑わいと、神社を中心とした旧商店街の賑わいとを、二極化している感のある一宮町を、青年部が橋渡し役となって融合させ、新たな町づくりを推進し進めようというものです。

「幸い、どの分野も私達の世代が台頭しつつあり、関係各所との信頼関係も築けています。各分野を担う若手同士が手を取り合えば、きっと、これまで以上に良い町になると、私は確信しています！」とのこと。青年部による新たな町づくりは、すでに始まっているようです。

時代に流されず いつまでも守るべきものもある

吉野さんが地元こだわりの大きき理由がもう一つ。それは「大が付くほどのお祭り好き！」ということ。会社員だった頃も、毎年9月には必ず帰省し、「上総十二社祭り」に参加していたそうです。

別名「裸祭り」と呼ばれるこの「上総十二社祭り」は、実に1200年以上の歴史と伝統を誇る、房総最古の浜降り神事であり、県の無形民俗文化財に指定されています。毎年9月8、14日にかけて行われ、例大祭となる13日は、約2500人の男衆が担ぐ5社9基の神輿が、祭典場となる釣ヶ崎海岸を疾駆。その

の中でアイデアや工夫を凝らし、季節感溢れる手作りのディスプレイで店頭を彩るなど、お客様の注目を集めるのが、とても上手だったそうです。吉野さんも、そんなアイデア溢れる楽しい店づくりを踏襲しつつ、客層に合わせた品揃えを常に心がけ、地元の方々の要望を可能な範囲で受け入れるなど日々努力を重ね、現在の店を作り上げてきました。

後継者の受け皿として 商店街の再生

「約20年前、町内に大手スーパーがオープンし、以来、客がそちらに流れ、私の店のある商店街自体の活気が薄れてきたのは事実です。しかし、どの商店もそれぞれの事情に合った経営手法を見出し、例えば経営の多角化に踏み切るなど、様々な努力を重ねて懸命に踏みとどまっている。それは、とても価値あることなのです。」

今、この商店街にとって何より大切なのは、現状維持でも構わないので、とにかく存在し続けること。

自身が経営者であるが故に、もちろん、商売は時代のニーズに合わせて、店舗、商品、そして販売方法など、変えるべき部分は変える必要があることは、十分理解しながらも、経営者の高齢化や資金面など、厳しい現実があるのもまた事実なのだと思います。

したがって、今この商店街に最も必要なのは、一宮町を愛し、戻って来てくれる、または新たに移民してくる後継者であり、その方々を受け入れるためにも、存続させることが何より大切なのだ、と考えているそうです。

様子はまさに圧巻です。

この祭りにおいて、現在も大宮地区で重要な役割を担っている吉野さんですが、近い将来、さらなる大役をすでに打診されており「責任重大ですが、それ以上に使命感を感じます」と語ります。

近年、市外から訪れる見物客も増えているというこの祭り。祭典場となる釣ヶ崎海岸は、揺るぎない一宮町の聖地です。

もっとも大切なのは 2020年以降のまちのあり方

「気候、風土、さらに立地条件も良好。田舎暮らしも楽しめる一方、都会へのアクセスも便利。よって子育てにも適している」と、一宮町の魅力を語る吉野さん。古き良き伝統や歴史があるが故に、頑固で昔気質な人たちが多く、一昔前まではサーフィンやサーファーを受け入れない声も聞かれたそうですが、現在では、サーファーたちのマナー向上も評価され、オリンピックへ向けて町の取り組みも盛んになってきました。

「2020年の東京オリンピックが起爆剤となり、それにより点火した町おこしの炎が、2020年以降も燃え続けて、町の未来を照らし続けたいと考えています。どうか期待しててください！」

青年部の部長である吉野さんの情熱は燃え始めています。